

〔大和文華館の日本絵画展によせて〕

岡田為恭筆「春秋鷹狩茸狩図」について

大和文華館では、平成17年の特別展に「復古大和絵 為恭 一幕末王朝恋慕展」を開催しました。岡田為恭は19世紀の前半に大和絵の復興を志した復古大和絵派に位置付けられている絵師です。この展覧会では、為恭の耽美的な絵画様式に近代的な美意識を認めることで、為恭芸術を再評価しようとした。絵師は後の人々に顕彰されて初めて後世に名を残すことができます。近代になると、展覧会が絵師の顕彰に大きな役割を果たします。為恭に関しても、京都恩賜博物館（現京都国立博物館）で昭和4年（1929）に「為恭」展、昭和17年に「復古大和絵派 訥言・一蕙・為恭」展、東京国立博物館では、昭和53年に特別陳列「冷泉為恭展」が開催されています。その後、しばらく期間を経ましたが、平成13年（2001）に岡崎市美術館で「冷泉為恭展 一幕末大和絵夢花火」が開催され、平成16年には、金刀比羅宮に所在する為恭資料を詳細に報告した『冷泉為恭とその周辺 一模本と復古やまと絵』が出版されるなど、為恭芸術が再び注目を集めるようになってきました。

顕彰活動によって社会的に絵師の評価が高まると、その後も引き続いて、重要な作品や資料が現われることがあります。「春秋鷹狩茸狩図」（挿図1）は大和文華館での展覧会を契機に再発見された作品です。

この作品は田中親美編『為恭画集下』（明治44年 田中繁薄堂発行）に久原房之助氏の所蔵として掲載されていますが、その後、所在

がわかりませんでした。編者の田中親美氏は、父の有美氏から絵を、多田親愛氏から書を学んだ大和絵、古筆の研究者として知られています。父の有美氏は為恭の従兄弟であり、為恭に師事していましたので、親美氏も為恭の画系に連なっています。この画集は為恭の没年から47年後の明治44年（1911）に発行されています。所蔵者の久原氏は銅山開発で成功した実業家です。叔父、藤田伝三郎氏の経営する藤田組から独立し、後に久原鋳業、日立製作所、日立造船などを創業しました。当時は42才、翌年の大正元年（1912）に久原鋳業を設立しています。

春秋鷹狩茸狩図は六曲一双の本間屏風に極彩色で描いた作品です。右隻に桜の咲く平野での鷹狩、左隻に紅葉の色づく山上での茸狩を描いています。ともに王朝時代の公家風俗図です。為恭は嘉永3年（1850）、28才の年に蔵人所衆を勤める岡田恭純の養子となって以降、作品の落款に官位官職を記すことが多くなります。本作品には、「式部少丞菅原為恭図之」と落款を記しています。為恭は安政2年（1855）に大録から少丞へ昇進しましたので、33才以降の作品とわかります。この少丞時代に為恭は最も社会的な地位が安定し、充実した制作活動をしています。安政2年には、御所造営に参加して小御所の襖絵6面を描き、安政4年には、徳川家の菩提寺である大樹寺に140面を越える障壁画を制作しました。小御所の襖絵と大樹寺の障壁画は、為恭にとって大和絵

を大画面へ展開した意欲的な作品です。本作品の右隻の鷹狩は御所小御所、左隻の茸狩は大樹寺大方丈の下段の間の画題に採用されています。

為恭は徹底した古画の模写や古物の写生、有職故実の学習によって、ほぼ独学で大和絵を学びました。本作品においても、右隻の第三扇、鷹を手に止ませた若い公家の乗る馬（表紙図版）は、「伴大納言絵詞」（出光美術館蔵）上巻の追捕師の随兵の乗る馬（挿図2）、鷹匠の乗る疾駆する馬は、同上巻の宮中の火事に駆けつける公家の乗る馬の姿にもとづいています。しかし、もちろん模写そのままではありません。鷹を手に止ませる公家では、為恭は馬の量感をさらに強調して顔の表情を変え、より精悍な姿に表現しています。為恭が理想とする王朝時代には、大和絵の大画面作品が公家の邸宅や寺院を飾っていましたが、古記録や古絵巻の画中画で偲ばれるだけで作品は残されていません。屏風や襖などの大画面作品を制作するには、掛幅や絵巻とは異なる構想力が求められます。本作品の画面構成には、為恭の創意が強く表れています。右隻の地平は川の上流に向かって画面の奥へ広がり、左隻の中程にある遠景の山並みに至ります。この山並みは左隻の山上から俯瞰した景観においても遠景となって、画面空間が融合されています。合理的な空間性は右隻が左隻よりも遠い視点で眺められるため、やや小さいスケールで描かれている点にも

表れています。右隻と左隻はひとつの大きな景観をなしていますが、右隻の鷹狩と左隻の茸狩では様々な対照的な表現が図られています。右隻では、画面右の鷹狩りの一行から馬を駆る鷹匠、いましも雉に襲いかかろうとする鷹へと目を移すにつれて、動勢はしだいに強まっています。一方、左隻では、公家、女房、童子たちは程よい間隔を空けて、それぞれ足元に視線を落として茸を探しています。

右隻の緊張感を伴う颯爽とした気分と左隻のゆったりとした気分の相違は、松や霞の形状や配置にいたるまで絵画表現全体に及んでいます。このような特色は従来の大和絵作品には見られません。六曲一雙屏風の大画面に制作することで、為恭芸術の根底にある近代性が引き出されたのでしょう。

（挿図2は『国宝 伴大納言絵巻』中央公論美術出版、2009年、より転載させていただきます。）

（中部義隆）

図2



図1（左隻・秋茸狩図）



図1（右隻・春鷹狩図）



季刊 美のたより No.172

平成22年10月1日

発行 大和文華館